

日本IT書紀

014 D P C

02 溟滓篇
卷之二 鶏子

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は
<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第十四

DPC

一

安藤多喜夫氏と会った日は、夏を思わせる強い日差しが照りつけていた。

同氏が「株式会社データ・プロセスコンサルティング」(DPC)を創業したのは、一九六四年の八月、戸谷深造氏が通産省の電子工業課長に就任したのと同じころである。東京オリソニックを前に、東海道新幹線が開通し、首都高速道路が建設されるなど、日本経済は活況に満ちていた。

DPCは当初、東京・新橋に本社を構え、七二年に芝に移転、次いで銀座三丁目の共同ビルに本拠を定めた。共同ビルの時代は一九九九年まで続いている。その間、社名を「アイエックス」に変更し、株式を東京証券業協会店頭に登録した。

余談だが、新社名を「アイエックス」にしたのは電話帳と新聞の株式欄を意識したためだった。企業名が五十音順で掲載されるため、カタカナの「ア」で始まる社名が好ま

れた。協業計算センターが「アイネス」、フジコンサル트가「アイネット」に社名を変更していたので、この二社より前に載るにはどんな名前にすればいいかを考えた。

——結果、「インフォメーション」「インテリジェンス」の頭文字である「EIIアイ」と「無限大の発展」の意味を込めて「XIIエックス」を合成したんだ。

と本人が話している。

次いで日本ナレッジインダストリ(NKI)と合併して社名を「アイエックス・ナレッジ」に変更し、社長の座を春日正好氏に譲った。東京証券取引所二部への上場を果たし、相談役となった。現在は創業者・社主として子息・文男氏の経営ぶりを眺めている。

設立から八年後、一九七二年時点の記録によると、資本金は四千万円、組織は

「社長の下にシステム開発研究会、運営会議、営業会議を置き、その下に総務部、運用管理部、技術部、コンサルティング部、営業部」とある。

主要業務は「プログラム作成」「運用管理」「パンチ業務」で、ソフト開発が全体の五二%を占めていた。従業員は二百六十一名である。また情報産業専門紙「日本情報産業新聞」一九八七年九月二十八日付の記事によると、

社員数千二百人の業界大手、受託計算とシステム運用受託を中心に、ソフト開発・販売、技術教育など事業の多角化を図り、VANサービスでセコムネットと提携、海外進出も果たす。

とある。

七二年に二百六十人だった社員数が十五年後に五倍に増えている。

——日本にも本格的なアウトソーシング・サービスを根付かせたい。

を常に目標として掲げていた。電算室の運営を一手に引き受けるサービスは、日本では「ファシリテイ・マネージメント」略して「FM」と呼ばれていた。

その言葉には、

——プログラム作成よりレベルの低い仕事。

というニュアンスがあった。

これに対して同氏は「アウトソーシング」という言葉で、高度なサービスへのイメージ・チェンジを図ろうとしていた。実をいうと、筆者はこの言葉を初めて安藤氏から聞いた。しばらくして他の会社で同じ言葉を聞いたとき、

——そうですよね。

と相槌を打つことができた。

ただし、そのときはEDSという会社のことまで知らなかった。

EDSとはエレクトリック・データ・システムズ社のこととで、ロス・ペローという人が設立した。一九九二年と九六年の二回、私費を投じてアメリカ大統領選挙に打って出た人物、といえは少しは分かりがいいかもしれない。

ちなみにいうと、「EDS」というアメリカの会社の名前が国内で広く取りざたされるようになったのは、一九九〇年代に入ってからだった。

通産省が情報サービス業向け優遇税制の通称に使った「システム・インテグレーション」略して「SI」が話題になり、新しい情報処理サービスの一形態として「アウトソーシング」「コ・ソーシング」が脚光を浴びた。

当時の「アウトソーシング」はコンピュータ、通信回線、ソフトウエア、オペレーション、コンピュータ・センターを一括してユーザー提供する「丸請け」型のサービス、「コ・ソーシング」はそれによってユーザーが受け取る利益に応じて対価を設定する、という考え方だった。

その先駆をなした企業として、EDS社をマスコミが一斉に取り上げた。情報サービス産業協会がEDS社のトップを招いて、大々的に講演会を開いたりもした。

氏にしてみれば、何をいまさら、というのが正直なところだったのでなかつたか。

久しぶりに会った「アンタキさん」は、ダンデイさは依然健在だった。頭の回転も舌の滑らかさも、少しも落ちていない。実際、この人の口から次から次に繰り出される話題に付いて行ける人は、よほどの理解力の保有者といわなければならぬ。おまけにこの人は早口で、あれこれ細かく説明するのが面倒な性質なのだ。当初予定していた一時間という時間はあつという間に過ぎた。

以下、同氏の回想。

二

一九五六年というと、わたしが在日米軍の補給廠でIBMのPCCSと格闘していたときだね。

当時は労働組合が活発でしてね。労働協約の遵守とか、就労環境の改善、賃上げとかでしょっちゅう職員のストライキがありました。米軍の待遇は、他の民間企業よりずっとよかつたんだけど、それでもストライキがあつてね、管理職だった自分らがPCCSの仕事を肩代わりしました。

私なんか、何も知らないでアルバイトからそのまま職員になつちやつたから、就労条件がどうのこうの、残業がど

うのというより、仕事が先、という感覚でしたね。それより、久しぶりに現場の仕事ができる、っていうんで楽しかつた。

真空管式の電子計算機は登場していたけれど、なんといつても主流はパンチカード・システム、つまりPCCSでしたよ。計算処理を全部パンチカードでやる。カードはIBM方式でしたから、カラムは八十桁でした。そのパンチも自分たちでやる。ソーターにかけて、機械に読み取らせるのも自分、プリントアウトするのも自分。ぜんぶ一人でやりました。そういう時代です。

集計も「サマリーカード」というのに出力されてね、それを印字装置にかけるんですよ。いまみたいにOSとかメモリーなんていう上等なものはないし、プログラムを組むのも配電盤の配線でしなけりやならなかつた。

配線は経験と勘がたいせつで、そう簡単には覚えられない。だから「ワイヤリング・スペシャリスト」なんていう言い方もあつた。人間がワイヤリングして機械を動かしていたわけだから、

——あ、いま読み込みに行つてるな。

——もうすぐサマリーが出るぞ。

とかね。

何がどうなっているか、計算機がどう動いているかが手

に取るように分かった。

今のコンピュータはブラックボックスで、何がどう動いているか、さっぱり分からない。人は結果を受け取るだけだ。けれど、当時はまさに計算機を動かしている実感があった。わたしはワイヤリングもやったけれど、全体のシステムを考えたり、仕事量を見て、人員を配置するのが得意だった。

計算機に出会ったのは一九五二年だから、昭和二十七年の春だったかな。わたしは当時、神奈川大学の学生でね、一九三一年生まれの二十一歳、忘れもしない十二月五日でした。

朝鮮戦争の真つ只中でね、日本を占領していたアメリカ軍が半島に駆り出されて、日本がその補給基地になっていたわけですよ。とにかく戦争ですから、夜中だろうと何だろうと物資を運ばなきゃならない。だから減茶苦茶に忙しかった。

わたしがなりたかったのは船乗りか商社マンでした。海外で活躍したかったし、資源が何もない日本を復興させるには、まず貿易からだと考えていたからね。生まれ育ったのが横浜なものですから、海外との貿易を身近に感じていたんですね。

ところが現実はどうと、まだまだ戦後の復興の最中で、あたりは空襲の焼け跡だらけで、戦災孤児や復員したけれど仕事がない兵隊さんとかが町にあふれていたし、大学を出てもロクな就職先がない時代でした。

たまたま新聞の求人広告で、川崎にあった在日米軍補給廠のPC S部隊——正式な名前は「在地米軍総合補給本廠電子計算部」だったかな——が事務員のアルバイトを募集していたんですよ。

——仕事で英語を覚えることができれば、商社マンになつたときいいだろう。

そう思いました。

たまたま知り合いに米軍の将校がいましてね、その人の紹介で応募したら、面接官が自分とほとんど同い年の若い人で、ちよつと驚きました。それが稲田博さんでした。

稲田博は一九三三年、神奈川県横須賀に生まれ、第二次大戦後、日飛モーターズの自動車整備工として働いていた。勤め先がアメリカ軍のジープやトラックの修理点検を受け持っていた関係で、英語が話せるのが買われてアメリカ軍所沢通信部隊に事務員として勤務後、川崎の在日米軍補給廠で新規採用を担当した。

のち「株式会社第一計算コンサルティング」(のち「第

「一計算」と改称)の設立に参画して計算機センター所長となり、七二年四月、東京都港区三田に「株式会社第一ソフテック」を設立した。

日本情報センター協会で副会長、情報サービス産業協会で常任理事兼総務委員長としてその活動を支えた。また、東京都と通産省の肝煎りで設立された「株式会社タイム二十四」では情報サービス業界を代表して専務の職にあった。

それ以来、仕事上では付かず離れず、個人的にはずーっと家族ぐるみ長い付き合いが続いています。どういうわけかセンター協では同じ時期に二人そろって副会長を務めさせてもらったし、お互いに浜っ子だし、自宅が近いこともあって、

「イナちゃん」

「アンちゃん」

なんて呼び合っています。

けれど、当時は自分を採用するかどうか決める人だから、そりゃあ緊張しましたよ。

紹介してくれた米軍の将校がね、「計算機は将来、世の中に広く普及する。今のうちに技術を身につけておけば必ず成功する」と言ってお励ましてくれたのを今でも覚えています。

三

——待遇はどうだったのですか？

給料はよかったですね。大卒の人より三割方多かったんじゃないかな。

仕事はね、最初はアルバイトだから、プリンターのカーボンの処理やパンチカードの運搬といった、力仕事と雑用でした。そのうち機械の操作を教えてもらって、いまいうとキーパンチャー兼オペレーター兼プログラマーの仕事をするようになりました。

通信部隊の物資を補給するために、計算機でデータを処理していたんですね。総員は六十人ぐらいで、四チームに分かれて朝六時から午後二時、午後二時から夜十時、夜十時から明け方の六時までという三交代制でね。シフト勤務手当てとか、語学手当てとか、それが本給の三割増しで付く。同い年のサラリーマンの給料が四千五百円のと、七千二百円もらっていたんだから、いい給料でした。

——計算機はどんな場所に設置されていたのですか？

カマボコ型の兵舎でしたよ。そこに機械が設置されていて、最初はただ地べたに板を敷いていたんじゃないかな。そのうちコンクリートの床になった。

夏になると猛烈に暑かった。あつちこつちに扇風機を置いて風を送るんだけど、閉め切りですからね。ランニングシャツと短パンで仕事をしました。外も暑いんだけど、それでもマシン室から出ると涼しく感じたもんですよ。

そんなことをやっているうちに、こつちの仕事のほうが目白くなって、結局、大学は卒業せずじまいでした。そういう人はわたしだけじゃなくて、ほかにも大勢いましたよ。だって自分も知らないうちに正職員に採用されていた、な

——本腰を入れたのはいつごろ？

二十四歳になったときでした。給料はいいし、仕事は面白いし、それでいつの間にか大学に行かなくなっちゃって、正規の採用試験を受けて正職員になったんです。当時、在日米軍の計算機部門で日本人が二千人以上、働いていたんじゃないかな。

立川基地の北川宗助さんが日本人のトップで、鉄砲とか弾丸とかの兵器、軍用自動車の部品、被服、食料、薬品、備品などすべてを計算機で管理していた。朝鮮戦争で米軍が使う武器とか、何がどれくらい、どこに必要か、全部分かった。ということは戦局の様子が手に取るように分かっちゃうわけですよ。

正職員だから、それなりに昇格するわけですよ。補給廠

のマネージャーになったとき、職員のストライキが起こってね。職員がストをしても、補給の業務は止められないから、管理職員が計算機の運用をしなけりゃならなくなった。こつちは何から何まで一人でやったことがあるから、徹夜の連続で仕事をこなした。カーボン紙を外すとき、汗でカーボンが体に付いて、真っ黒になったな。

そのうち朝鮮戦争が休戦に入って在日米軍基地が縮小され、昭和三十四年（一九五九）に北川さんも島村浩さんと「日本ビジネス」を作るとか、米軍のPCSの仕事をしてきた人たちがほとんど独立していった。わたしは先々のことをあまり考えていなかったし、他の人の就職口を探したりしているうち、結局、最後まで残っちゃった。

——独立は？

一九六〇年にやつと米軍の仕事から抜けて、補給廠で知り合った畑重雄さんという人が作った「第一計算コンサルティング」という会社の仕事をお手伝いをしたのが、この商売に入る最初でした。稲田さんはこのとき、「IBM650」の技術者として、第一計算の計算機センターを任ざれていたんじゃないかな。

彼は優秀なプログラマーでしたから、第一計算が分裂したとき、計算業務だけじゃなくてソフト開発も受託できる会社を指向したんです。それで作ったのが「第一ソフトテッ

ク」。わたしはそのときもまだ、自分の将来を決めかねていました。

手ごたえを感じたのは、日立製作所の家電事業部、今の日立家電の市場調査プロジェクトに参加したときです。計算機なんて誰も知らないものだから、わたしがシステムを設計して、プログラムを作りました。ちよつとカッコいい「プロジェクト・プランナー」という肩書きをもらいました。その経験が、「データのプロセスをコンサルタントする」という社名につながっています。

何を調べたかというと、カラーテレビの将来性でした。昭和三十年代、まだ白黒テレビでさえ家庭に普及していなかったのに、日立はもうカラーテレビのことを調査していたんですね。

「将来、七千二百万台の大きな市場になる」という結論を計算機がはじき出して、日立は研究開発に自信を得たんです。マーケット・リサーチのはじめでしたね。これがきっかけで、日立の仕事を受託するようになったんです。

最初はパンチ業務でした。

三十三歳のとき独立して会社を作ったんだけど、計算機は高嶺の花でした。霞が関のお役所や保険会社に勤めているパンチャーがオフィスから引きあげてくるのを待って、新橋駅あたりで「アルバイト募集」のチラシをまきました。

それでパンチャーを集めて、客先にあるマシンを使わせてもらって受託計算の代金をいただいた。

若かったから、徹夜なんてへっちゃらだし、計算機のことなら任せろ、っていう自信があった。とにかくハングリで、どうしたら儲かるか、次はどんな仕事をやってやろうか、ということばかり考えていましたね。

文中の「日本ビジネス」については後述する。


~~~~~ 補注 ~~~~~

日本ナレッジインダストリ NKI…一九七九年(昭和五十四)三井情報開発(MKI)から西尾出がスピノフして設立した。日本情報産業新聞 一九七〇年六月創刊。日本電子計算機開発協会系のEDP出版の編集スタッフを「媒体名変更」のかたちで継承した。このため一号から五十号に「EDPジャーナル」を当て、「日本情報産業新聞」は五十一号から発行された。EDP出版との資本関係はない。二〇一七年六月に休刊した。エレクトリック・データ・システムズ EDS…二〇〇八年五月、ヒューレット・パッカード社に買収された。

ロス・ペロー Ross Perot / 1930 ~ 2019。IBM社の営業マンだったとき、高価な電子計算機を共同利用するサービスを思い立ち、一九六一年、夫人から一千ドルを借りて事業を興した。情報システムの構築、運用、保守を一括して受託する「アウトソーシング」サービスを確立し、IBMプラグコンパチブル・マシン(PCM)市場の形成にも貢献した。一九八四年保有株式をゼネラル・エレクトリック社に売却した資金で八八年、九二年の大統領選挙に無所属で出馬した。のち「ペロー・システムズ」社を設立した。

米軍基地での日本人の待遇 初任給は「公務員四級相当」とされ、立川基地の場合は東京都の職員として扱われた。民間企業の大卒初任給が月四千五百円、安藤多喜夫氏が最初に受け取った金額が七千二百円というのは、そのことを指している。このほかに「外国語手当」があり、残業や深夜・早朝、土日勤務の手当では平

常勤務の三割増しだった。さらに米軍関係施設に出入りする専用の身分証明書(パスポート)、シャワーつき個室の宿舎、食料品の特別配給、車での送り迎えなど、特権に近い待遇だった。

日本ビジネス 一九五九年に設立された。計算機を活用した計数的経営手法を基盤にした国内初のコンサルティング会社。第二次大戦前の日本ワットソン統計機械販売(日本IBMの前身)で働いていた島村浩、北川宗助らが連合軍総司令部電算部門、立川基地PCS部門の要員と協力して設立した。設立当初の本社は東京・茅場町に焼け残った山種証券ビルにあった。次いで銀座の高島屋裏に移った。ここから国内初の受託計算センターである日本ビジネスコンサルタント(NBC、のち日立情報システムズ)、ビジネスコンサルタント(ビーコン)などが分離独立していった。

# 日本IT書紀 014 D P C

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。